

ニコロ・マキアヴェルリ管見(下)

——特に其の文學的作品について——

柴 山 英 一

ハ、クリツィア

一五二五年にフィレンツェで上演された「クリツィア」

(Clizia) 全五幕は疑ひもなく「マンドラゴラ」の後に書

かれたものであつた。何故ならば其の第二幕第三場に於

て「マンドラゴラ」のルクレツィアに言及してゐるから

である。⁽²⁵⁾又此の作品中の事件は一五〇六年の日付である

から、「マンドラゴラ」の其れより二年後である。之は

プラウツスの「カシナ」(Cassina) の單なる模倣であつて

其の價値は「マンドラゴラ」よりも遙かに劣つてゐる。

又此の「カシナ」たるや其れ自身實はギリシヤ演劇の焼き

直しと云はれてゐる。時としてマキアヴェルリは殆んど

逐語譯に近い位原文に従つて居り、又比較的模倣の少な

い場所は活潑にペンを運んでゐる。然し全篇を通じて彼

の喜劇能力は其の競争相手たる偉大なラテン戯曲作者プ

ラウツスに劣るといふの外はない。彼は餘りに力を入れ

過ぎて却つて此の劇の一番よい部分を弱くしてしまつた

のである。⁽²⁶⁾

先づ前口上は嚴肅誇大な散文で書いてゐるが其の中で

作者は幾多の政治的作品中に屢々明言した觀念を繰り返

してゐる。即ち人類は常に同一であるから嘗てアテネに

起つた事實は今やフィレンツェに於てさへも起り得るの

であると述べ、容易に古代劇を現代劇に轉用翻譯してゐ

るのである。^{③①}先づクレアンドロ (Cleandro) と其の老いた父ニコマコ (Nicomaco) の兩人が其の家の娘のやうに養育されて来たクリツィアといふ少女を戀するのである。ニコマコは彼の下僕のピルロ (Pirro) に彼女を嫁がせようとする。クレアンドロも色んな悪計で父の計畫を打ち壊さうと試み、彼の代辯人のユスタチオ (Eustachio) と結婚するやうにと提議する。そして凡ての事情を知つてゐる彼の母ソフロニア (Sofronia) が其れを助けるのである。^{③②}此の場面は物語風に書かれてゐるが、ブラウツスでは非常に滑稽な問答になつてゐる。マキアヴェルリも初幕(全三場)ではクレアンドロに長い獨白をやらしてゐるのである。此處でクレアンドロは戀人や兵士の生活を述べた後、寧ろ政治又は歴史的論文に適した一般的反省に耽けるのである。^{③③}

第二幕(全五場)の第三場はソフロニヤが少女を代辯人に嫁せようとして夫ニコマコと口論する賑かな場面である。ソフロニア「代辯人のユスタチオは仕事によく注意して資金も有り、水とペンで立派に生活してゐるので

す。下僕のピルロはどうせ一生を居酒屋や賭博場で過し
麻仁(アサノミ)だけ食べて餓死するのが落ちです。^{③④}それ
から第四場では彼女は舞臺に獨り残つて夫をうまくだま
してしまつた顛末を眞に迫るやうな調子で述べ、當時の
フィレンツェ市民の生活について明瞭な描寫をしてゐる
のである。即ち「あの人は今まで聖餐式にはいつも出席し
たし自身の事柄にとても注意深くて萬事規帳面でした。

それに此の少女に興味を持つてからは仕事は疎かにな
り、農園はうまくゆかないし商賣は失敗してしまひまし
た。そして何故つてこと無しに、いつも怒つてゐるし毎
日家に居ても外に在つてもせか／＼して何をしてゐるの
か知れやしない」と。^{③⑤}此の邊りの言葉遣ひは非常に生氣
があり、フィレンツェの成語で満ちてゐるのである。尙
第五場には下僕と代辯人との對話があるが、其れはブラ
ウツスの初幕の對話から上手に模倣したものである。

第三幕(全七場)の第二場ではクレアンドロが自分の父
を戀愛の競争者にしなければならぬことを嘆くのであ
る。^{③⑥}此の場面には少しも冗談、洒落は無く又反對に悲劇

的要素が多分にあるわけでもない。第四場では「カシナ」の場合と同様に妻は遂に夫の意志に従つてピルロに有利に決まるやうな機會に凡てを委ねようと意見が一致するのである。⁽¹⁷⁾

第四幕(全二二場)の第二場ではニコマコが今や今や成功疑ひ無しといふわけで満悦の態である。然し事實は雛が解る前に其れを數へてゐたに過ぎなかつたのである。

彼は先づ素直な下僕と結婚式の方法や自分が最初に花嫁獨りと逢ふべき家について喜びの中に話を取り決めるのである。⁽¹⁸⁾然し彼の妻は嚴重に監視して一刻も彼を離そうとしない。そして憐れなニコマコは遂にクリツィアと二人限りでなく假裝した若い下僕と逢ふといふやうな仕組に事を運ぶのである。其の年取つた夫が陥穽にかゝつて笑草となる様子は實に滑稽其のものである。其れは恐らくプラウツス以上の獨創性さへ示すものである。勿論其の大部分は「カシナ」から翻譯されたのであるが、⁽¹⁹⁾然し後者の場合には少女は前者に於けるやうに自由な人間にではなく、或る奴隷と婚約させられる。従つて少女の盲目

的な絶對的屈從は近代劇よりも古代劇に於て一層はつきり表はれてゐるのである。

第五幕(全七場)の第三場では妻は自分で工夫した策略に感謝し、其の目的を遂げ、へこまされた夫は遂に彼女と仲直りをするのである。⁽²⁰⁾最後の場では恰度其處ヘナポリ(Naples)から到着した紳士はクリツィアの父ラモンド(Ramondo)であることが分り、喜びの中にクレアンドロと彼女の結婚式が擧げられることになるのである。⁽²¹⁾此の最後の出來事はプラウツスの喜劇では只披露、説明されるだけであつて、實際は少女も夫たる若者も舞臺には登場しないのであるが、マキアヴェルリの場合にはクリツィアが現れない點が先例に従つてゐるわけである。又プラウツスは父子間の戀愛競争の光景には眞に喜劇的な要素はなかつたことを認めてゐるが、マキアヴェルリは此の點彼に従ふことを拒否してゐるのである。⁽²²⁾

ニ、其の他

右に述べた二つの作品は何れも序言の前と各幕の終りに歌謡(但し「マンドラゴラ」の最後の第五幕には無

い)が附いてゐるが、此處では先づ最初に純粹の散文喜劇「ブラーテ・アルベリゴ」(Frate Alberigo)について述べる。之は三幕(一八場)から成る短篇で其の題材はフィレンツェの有閑社會にセンチシオンを起した或る事件から採られたものであるといふことだ。其の筋は大體次の通りである。クレテ(Crete)といふ召使ひの少女があつて彼女は其の老いた主人アメリカ(Amerigo)と牧師のアルベリゴの二人から非常に信頼されてゐる。アメ

リゴは彼の爲には教母に當るアルフォンソ(Alfonso)の妻に戀するのである。又アルベリゴはアメリカの若き妻カテリーナ(Caterina)に心を惹かれる。又彼女は夫アメリカの辯解を聞いたりするが到々辛抱出来ずに、召使ひのクレテに戀人を見付ける方法を知るのである。其處でクレテは牧師のアルベリゴのことを話して容易に彼女を説き伏せる。アルベリゴは自分の立場が有望であることが分ると、すぐにアメリカと其の教母との情事を滅茶苦茶にしようとする。彼は教母の夫アルフォンソと知つてゐるのであるが、そんな關係でカテリーナがアルフォンソ

の家にやつて来る。彼女は教母に逢ひに来る夫アメリカを待ち受けて夫を愚弄、輕蔑するのである。其處には騒々しい光景が展開されるのであるが其の最中に恰も偶然であるかのやうにアルベリゴが登場して直ちに夫婦の間を調停しようと試みる。妻は罵詈雑言を爆發させた後お互ひに仲直りをする。そして此の牧師を彼等の懺悔聽聞僧に選ぶといふ筋である。

此の作品中のマキアヴェルリの言葉は寧ろいつもより下品であり又物語りで身振りの場面を補つてゐるのである。勿論其處には例の豊富にして立派な對話もあるが全體として各配役の眞の個性が出てゐないやうである。要するに此の作品は彼の喜劇に對する鑄脈の乏しさを示すものであつて、事實「アンドラゴーラ」の後にはより以上の獨創性のあるものは作り得なかつたわけである。

次に韻文喜劇全二幕とテレンスからの翻譯である「アンドリア」(Andria)の二演劇について少しく述べねばならぬ。前者は或る人々にはマキアヴェルリの青年時代の作品であると考へられてゐるが、其の眞偽については今

日まで種々論議されてゐるのである。稍ともすれば其れを彼の作品であると信ぜしめ得る顯著な理由がある。其れはフィレンツェの國立圖書館のストロツツイ手寫集 (Strozzi Codex) の中にマキアヴェェリ手記の喜劇が含まれてゐることである。然し同じ手寫集の中に今日では全く彼の作品とは考へられない所の「ペストに關する記述」 (Descrizione della peste) といふ手記が含まれてゐるところから想像すると、かゝる外部的證明は價值が無いとが分るのである。更に外證から内證に眼を轉ずれば、此の韻文喜劇を彼に歸することは非常に困難であることが一層明瞭になつて來るのである。之についてはドイツの作家で且歴史家として知られたカール・ヒルブランド (Karl Hillebrand, 1829-84) 教授も同じ意見を述べてゐるのである。劇中カミルロ (Camillo) とカティルロ (Cattilo) といふ二人の名前を混同して、古代ローマ人の生活を描いてゐるが脚色も文體の魅力も全然無く、人物は活氣と自發性に缺け且非常に冗長な讀物である。全く獨白の詩司詰めでマキアヴェェリの劇や詩に付きものゝ

機智とかフィレンツェ人らしい諷刺、或ひは言葉の變化を持ち合せてゐないのである。従つて何處にも彼の獨白詩と想はれるものは見當らないのである。尙マコーレーも此の劇詩は長短何れもマキアヴェェリの其れには似てゐないと主張し其の眞實性を否定してゐるが、此の意見には同意してよいと思ふのである。

アンドリアは同名のテレンス作喜劇の唯一のイタリヤ語譯である。原文と比較するとラテン語が忠實に翻譯されてゐない點があり全體として譯文は拙である。誤譯の一例を拾つて見ると次の通りである。先づ初幕第五場ではパムフィルス (Pamphilus) が最初拒絕され後には喜んで其の娘をやらうといふクレメタス (Cremetas) の言葉を聞いて其の眞意を疑ひ「Aliquid monstri alunt」と言ふのであるが、マキアヴェェリは之を文字通りに「何か一種の怪物を養つてゐる」と譯してゐるのである。然し其れではナンセンスになつてしまふのであつて、此處では「此の點に或る極悪の行爲がなければならぬ」と譯した方がよいのである。又娘のミシデ (Miserie) が勞働の苦

痛を味つてゐると話してゐる處では彼は單に「彼女は苦痛の爲に死に瀕してゐる」と譯してゐる。従つて恐らく此の作品は後で十分に修正されなかつたのであるといふ結論に達するわけである。然しより近代の翻譯に有り勝ちな平凡さに比較すれば寧ろ其の新鮮さ自發性といふ點で勝れてゐるのである。¹⁵⁾

以上がフィレンツェ書記官の劇作の概要である。尙少しく後に出た作家ジョヴァン・パチスタ・ゲルリ (Giovanni Battista Gelli) の佳作「ラ・スポルタ」(La Sporta) はマキアヴェェルリの同名の遺稿からヒントを得て書かれたものであることを忘れてはならぬ。此の主張は屢々否定されたのであるが反對にリッチ (Ricci) 家のジュリアーノ (Giuliano) に依つて確認されたのである。ジュリアーノは其の著「プリオリスタ」(Priorista) の中で彼の祖父ニコロがテレンスの「アウルラリア」(Aulularia) 等を基礎として「ラ・スポルタ」を作成したと明言してゐるのである。此の劇作は嘗てベルナルディノ・デイ・ジオルダノ (Bernardino di Giordano) が所有してゐたが、後ゲル

リの手に入り、彼は其れに少し補説を加へて彼自身の作品として世に出したのである。而も彼は其の題寄の書の中で自己の實際生活から此の題目を採擇したのであると稱してゐる。又序文の中では故意にプラウツスやテレンスを模倣したと自認し、第三幕第四場では何等註を加へること無しに「マンドラゴラ」や「クリツィア」にも言及してゐるのである。事實彼は非常にマキアヴェェルリを研究したのみならず亦よく彼を模倣したといふことは一般に知られてゐる所である。「スポルタ」を注意深く讀むと其の問答の眞實さ、快活さ、又其の獨白を通して所謂マキアヴェェルリらしさを推測することが出来るのである。彼が書いた梗概は今日失はれてしまつたが、恐らく彼は例の活潑な調子で此の劇の骨組だけを記してゐたことであらう。而も其れに色々手を加へて複雑にしたのはゲルリであつたと思はれるのである。何れにしても此の「スポルタ」は喜劇作家としてのマキアヴェェルリの名聲には何等影響を與へなかつたことは事實である。何故ならば前記の如く「マンドラゴラ」のみが眞に彼をして劇作的才

能の持主たらしめた唯一のものであつたからである。

二、詩

イ、ルァジノ・ドーロ

マキアヴェルリが其の閑暇を幾ばくかの第二次的な詩や散文の作成に利用したのは劇作と同様に一五二二年フィレンツェ共和政府瓦解後サン・カシアノ(San Casciano)^①に隠棲してからであつた。彼がものした二、三の詩について言へば其れ等は平易、活潑而も諷刺的で散文詩に近かつた。又其の中には屢々辭句の強い表現や深遠にしてよく統制の取れた思想が見出されるのである。然し其れ等は我々に「君主論」や「ローマ史論」を想起せしめるやうな哲學的格言、考察であつて、想像力とか描寫のオリジナリテイとか換言すれば眞の作詩に極めて必要な長所を有してゐないのである。其れにも拘らず之等の詩は讀者に作者の精神状態をよく理解せしめ得るのであつて、言はず彼の知性史について一層明瞭な概念を興へるものである。

「ルンシノ・ドーロ」[L'Asino d'oro. 黄金の驢]は一五

一七年に作者がダンテ(Dante)の「神曲」[Divina Commedia]の如く詩想を引きしめつゝも、なだらかに流れて行くテルツァ・リーヤ(terza rima)^②の詩格を用ひて書いた譬喩詩である。同年に彼がロドヴィコ・アラマンニ(Lodovico Alamanni)に宛てた手紙には、之は大切な作品だと思つてゐるといふ意味を記してゐるが而も彼は極めて短い最初の八章を書いた後、創作力と刺戟を失つて中止してしまつたのである。其の表題やテーマはローマの古詩から採つたらしいが諸所に「神曲」を模した傾向を見出すのである。然し其の本旨はやはり彼の時代のフィレンツェ人に對する諷刺であり刺戟たらしめんとするに在つたのである。即ち或る詩人が自然のまゝの森林に分け入り其處でダンテの場合の三匹の野獸ではなく、魔神キルケ(Circe)の娘が獸群に取り巻かれてゐるのに出遭ひ、彼女に依つて或る宮殿に導かれるのである。其處で彼も亦獸に變へられることを警告される。其の内に一同と晚餐を共にし彼女の魅力について其の美を詩に唄ふのである。やがて獨り其の場に殘された彼は忽

ち哲學者のやうに其の理由を考へ始めるのであるが此處にマキアヴェルリらしい考察が示されるのである。以下其の大略を述べることにする。

先づ彼は偉大なる者をして其の権力の頂上から没落せしむるのは限り無き領土慾の結果であるとす。例へばヴェネチアは嘗て其の領土を大陸に擴げようと試みた際間から衰へ始めたのであり、スパルタ(Sparta)とアテネ(Athens)は彼等が其の近隣を征服してしまつた時に權力を失ひ始めたのである。之に反してドイツ人の小共和國は自由で平和であり、城壁に近く境界を有するフィレンツェはヘンリー四世(Henry IV)の侵入を防ぐことが出来たのである。然し現代に於ては全く畏縮してゐる状態である。元來政府といふものは良い法律なり純正な方法を有する時には遙かに持続性のあるものだが其の場合でも永続的な平和を確保することは出来ない。何故ならば變化は人類の出來事に於て避け得られぬものであるからである。⁽⁵⁰⁾又善は惡を隨伴するのは過去、未來を通じて同一であらう。祈禱は人々に取つて全く必要なものであ

るが、其の力に依つて憂を艱難を逃れようと思ふ人は大いに欺かれるであらう。以上が第一章―第五章までの詩の大意であるが、之は寧ろ純粹の詩句ではなくて「ローマ史論」の項目を詩の形で表現したと見るべきである。尙最後の三章は哲理的な内容は少ない。即ち其の美少女が詩人を伴つて獸類を見せに行くのであるが、彼は先づ最初に彼等獸類の目錄を示される。それから一匹の肥つた豚に話しかけてもう一度人間になりたいかと尋ねると其の豚は凡ての苦惱から自由な獸類の状態を讚美し、あらゆる點に於て獸類の運命は人類の運命よりも増してゐることを極力主張するのである。⁽⁵¹⁾マキアヴェルリの論敵であつたブジーニ(Busini)に従へば此の詩の中の引喩はルイヂ・グイツイアルディーニ(Luigi guicciardini)とメディチ(Medici)家の支持者達に向けられたといふのであるが確證は無いのであつて、事實マキアヴェルリ自身も次のやうに明言してゐるのである。即ち獸類の中には彼が嘗ては尊敬してゐたが後になつて小羊のやうな氣の弱い行動をした爲に攻撃したい舊知の人間が居たといふ

のである。更に此の詩は英雄が強情者の驢に變らうとする所中で絶してゐる。従つてブジニヤ其の他の同時代の作家が其の意味をはつきり解することが出来なかつたとすれば、今日我々が其の謎を解くのは蓋し不可能に近いことであらう。

ロ、其の他

次に小詩としては先づ第一に彼の友人フィリップ・ディ・ネルリ(Filippo dei Nerli)に宛てられた短篇「Capitolo dell' Occasione」がある。之は以前はギリシヤ文學を西ヨーロッパに紹介したビザチン(Byzantine)のプラステス(Planudes, 1260-1330)の佳句集にあるギリシヤ寸鐵詩を模倣したと考へられてゐたが、實はローマの詩人アウソニアス(Ausonias, 310-395)が書いた詩文の翻譯である。アウソニアスがギリシヤ寸鐵詩をマキアヴェェルリがアウソニアスを翻譯したのである。イタリアの人文學者で詩人であつたアンジェロ・ポリツィアノ(Angelo Poliziano, 1454-94)は既に此のギリシヤ語の寸鐵詩とアウソニアスの其れを校合對照して異同を指摘してゐる。

稍長篇の作品にはジョヴァン・ベチスタ・ソデリーニ(Giovan Battista Soderini)に宛てられた傑作「Capitolo di Fortuna」がある。其の中で彼は頗る巧みな形容を以て運命觀を説くのである。即ち唯一の幸福な人間といふのは回轉してゐる幸運の車輪に自分を取り付け得るものである。然し其の車輪の運動は永遠に變化しつゝあるから其れだけでは不十分である。其處で我々はどうしても一つの車輪から他の車輪へ跳び付く用意が必要である。而も人間を支配する所の隠れた力は中々斯くすることとを許さないのであつて、我々は自己の性格を變へることとは出来ないのである。従つて我々が高く登れば登る程益々低く落ちる自己を見出す時こそ運命が彼女の力の限界を示す時であると述べてゐる。^⑧

第三はジョヴァンニ・フォルキ(Giovanni Folchi)に宛てられた「Della Ingratitudine」である。之は餘程急いで書かれたらしいが、先づ始めの方には彼の不運について二、三の注目すべき言及がある。他人の嫉妬、羨望の牙に裂き破られて——こんな調子で始めてゐるが——

私の不幸は非常に増大した。私の七絃琴の絛にふさわしい詩想は私には無い。眞の詩人でないことは私自身がよく知つてゐる。而も小徑に撒亂した幾何かの桂樹を縣命に拾ひ集めたいと思ふ。更に運命の本質については次のやうに記してゐる。運命の星が男子の名譽心に迫害される時。貪慾と猜疑の娘である忘恩が産れる。彼女は主として王侯の心と邸宅に其の住ひを持つてゐるが、三つの毒を塗られた投げ槍で傷を蒙つてゐるのである。其の一は恩恵を償はぬまゝにしてゐること、其の二は恩恵を忘れてしまふこと、最後に積極的に恩人を侮辱することが之である。

更に彼は次のことを附加する。民主政治の元に在つては忘恩は其の無能に比例して大きくなる。此の場合有爲の市民が常にひどく虐待されるのである。そして時としては暴力政治を樹立する爲に放逐されることもある。又彼は彼自身の時代に觸れる前にギリシャ史のアリステデス(Aristides)やローマ史のスキピオ(Scipio)及びケール(Caesar)に言及し、又其れ等の歴史の中で彼は民衆

よりも寧ろ王侯たるものが一層恩を知らないことを發見し、其の實例としてフランス軍を撃破した報酬として却つて其の君主に敬遠された武將コンサルヴォ(Consalvo)を挙げ、最後には殆んど自戒めいたことを記してゐるのである。⁵¹⁾

次に友人ルイヂ・グイツイアルディーニに宛てられた「Capitolo dell'Ambizione」に於て彼は再び政治哲學的な考察を下してゐる。其の中には一五一六年にシエナ(Siena)の君主ペトルッチ(Petrucchi)家に起つた兄弟の鬭争を次のやうに記してゐる。即ち野心が兄弟殺しを始めたのであつて、人類は嘗て此の野心から解放されたことは無いのである。従つて世界には眞の平和無く是までに諸國は崩壞し君主は幾度となく放逐せられた。而して野心が或る場合には成功し他の場合には失敗に終るのは人類の獠猛さが野心としつかり抱き合つてゐるか否かに依ることを述べたいのである。若し何人かゞ自然はも早かゝる精力家を恵んでくれないと云つて自然を非難するならば、自分は彼に教育が常に自然の缺點を匡正し得る

ことを氣付かしたかったのである。教育は嘗てイタリアを繁榮させ強力にした。今や此のイタリアを眺めるならば只殺戮と荒廢あるのみである。父子は殺され、多數の者は外國に逃亡し、母は娘達の運命に泣き、溝や川は血で汚され、人骨で滿ちてゐる。其れ等は皆野心の結果である。トスカナでは野心が山の彼方の空高く舞ひ上つてゐて、既に毒心ある人々の間に火花を散らして來たのである。若し彼等が何か秩序ある事柄に依つて蹂躪されないならば、都市も田舎も破壊、消盡されてしまふであらう。尙此處で彼は一五一六年に起つたメデイチ家のロレンツ†(Lorenzo)とウルビノ(Urbino)との戦にも言及してゐるのである。^⑤

外に「Capitolo Pastorale」の第三篇と「八行詩のセレナーデ」の中に稍注目すべき句がある。前者の題材には諷刺や哲學的考察は全然無く、純粹に田園詩的なものである。従つて彼のペンは緩慢に動いてゐるのである。後者は非常に平易なものでポリツィアノやアリオストの其れに比較すると見劣りがするのであるが、イタリアの

詩人で愛國者であつたフォスコロ(Foscolo, 1778-1827)は或る友人に送つた手紙の中で次のやうに稱讃してゐるのである。即ち「マキアヴェルリは偉大な詩人ではなかつたが、彼が戀愛を感じてゐる時に書いた詩の中には感情の暖さが如何にも彼の創作力を鼓舞したことを示すものがある」と。更にフォスコロは此の「セレナーデ」の中から二、三の句を引用して説いてゐるのである。

マキアヴェルリは又ロレンツォ・デイメデイチを模して異つた音律で詩歌(Canto)を作成した。其の中には極く自然なものもあるが、多くは粗雑でロレッツォの其れに比較すると新鮮にして活潑な描寫を缺いてゐるのである。^⑥其の一は「Canto dei Diavolo」で多くの妖魔が地球上に跳び降りて、自分等は凡ての善惡の創始者であると宣言し、人類に彼等の支配を受けるやうにと迫るのである。其の二は「Canto d'amanti disperati e di Donne」で之は戀人達が地上の戀愛に對する惡魔の拷問、荷責を悲しみ、寧ろ地獄に陥つた方が幸せであると言つて憐みを乞ふのであるが、其の内に戀愛のチャンスは徒らに過

きてしまふのである。次に「Canto degli Spiriti beati」と題する一篇は人類殊にイタリアの不幸に對する挽歌であるが、之に依つて我々は彼がいつもの反省なり祖國及び古代の勇氣に對する絶ゆまぬ研究に餘力を用ひてゐたことを知ることが出来るのである。尙「Canto degli uomini che vendono le pine」及び「Canto de' ciurmadori」は純粹の謝肉祭祝歌に似てゐるのである。之等は非常に短い小歌(Canzoniere)と二つの八行詩(Ottava)と一四行詩(Sonnette)である。小歌はギリシヤ諷詩の模倣であるとも云はれ、八行詩と一四行詩は餘り價値あるものではなく戀愛を取扱つたものである。

此の外に未刊行のまゝに遺された短詩も有り得るわけである。何故ならば彼は屢々氣晴しに作つたからだ。今日ローマのヴァティカノ文庫(Vaticano Library)には彼が父に宛てて書いた少年時代の一四行詩があるが、俚語に富んだ變則語である爲に殆んど判讀出来ないのである。^⑩

三、散文

イ、言語に關する問答

次に散文の方では先づ第一に「言語に關する問答」(Dialogo sulla lingua)を推さねばならぬ。之はダンテ、ペトラルカ(Petrarca)、ボツカチオ(Boccaccio)の書いた言葉が純粹のイタリア語又はフィレンツェ語と呼ばれるか否かといふ問題を中心に論じたもので、始めと終りが叙述體で中間はグンテとニコロの問答の形式になつてゐる。ポリドーリ(Polidori)は此の作品が事實マキアヴェルリに依つて書かれたといふ説を否定して次のやうに述べてゐる。即ち嘗て幾多の不幸の中で野蠻人の入來は少くともイタリアに新しい言葉といふ尊い福利を招來したものであると述べたマキアヴェルリが後に此の論文中では其の新語をフィレンツェ語若くはトスカナ語といふよりは寧ろイタリア語と稱した方がよいと力説する人々を非難してゐるのは合點がゆかないといふのである。然し此の名稱についてのマキアヴェルリの論議は決して新語の價値、特徴を否定したのではないのである。又ポリドーリはイタリアの苦難を常に歎いてゐたマキア

ヴェルリがフィレンツェの恐しい破滅を豫言したダンテを非難するやうなことは有り得ないといふのである。而も論文中に詩人ダンテの豫言が當らなかつたことを證明する爲に、運命が破滅の代りに現状のやうな幸福と安寧をフィレンツェに齎したのであると記してゐるのは如何にもマキアヴェルリらしくないといふのである。然し前書記官は屢々彼の時代のフィレンツェ共和政治の状態を稱揚し、又彼の死後漸く本格的になつた君主の支配については何等言及してゐないのである。尙同論文の作成は一五二二年以前であつて、其れについてはリッチ家のジュリアーノに依つて確證が擧げられたので、ポリドーリ其他の人々の疑問は解消されたのである。即ちジュリアーノに據れば此の作品は部分的にはマキヴェルリのいつもの文體とは違つた點もあるが、確かに彼の手であることは間違ひない所であつて、現にマキアヴェルリの長男で七〇餘歳になつてゐるベルナルド(Bernardo)が彼に向つて、自分は父から此の論文のことを聞いたことがあるし、又屢々其れを手にしてゐるのを見たことがあると確

言したといふのである。其れは確かにマキアヴェルリにふさわしくない一種の不自然さを示した點もあるが、其の様式の特異なことは非常に博識な文學上のテーマに依つても容易に説明されるのである。此のことは「ローマ史論」や「君主論」又は「フィレンツェ史」に於ても同様である。其の他の部分は例の快活さ、寫實的な力、自發性に於て缺くる所がないのであつて、其の本質を精査すれば確かに鋭敏にして獨特の比喩、觀察、思考並凡ての疑惑は必然的に解消され得る所のマキアヴェルリ獨特の性質を見出すことが出来るのである。

亦同論文は幾分誇張した文體ではあるが、彼の如何なる作品中にも滅多に缺いたことの無い感情の新鮮な表現を以つて始まるのである。例へば「大なり小なり我々の主たる義務は、我々が全存在を依存してゐる所の郷土、即ち祖國に依つて要求されるのである」と云ふやうな調子である。以下彼の意見の概略を述べることにする。⑧
フィレンツェの詩人や散文作家等によつて用ひられる慣用語、はイタリヤ語、トスカナ語、フィレンツェ語の中の

何れに相當すべきかといふことが過去に於ては屢々論争されたが、其れに刺戟されて此の論文を書く次第である。或る人々はあらゆる言語に特殊な性格を與へるのは *si (Yes)* の如く肯定の副詞であると稱し、又他の人々は動詞のみが言語の鎖であり要素であつて、言語の區別は動詞の相違から來るものと主張する。然し事實は動詞のみならず、各言語の名詞や其の他の品詞の變化は何れも共通の起原を有するものである。イタリアでは地方に依つて名詞には非常な相違があるが代名詞の變化はより以上少ないし、動詞に至つては一層そうである。従つて十分に而も容易にお互ひを理解し得るのである。又イタリア人の言語には地方々々で幾分アクセントに變化があるが全然解らないといふ程ではない。例へばトスカナ人は母音で發音するが、ロマニア人 (*Romagnols*) とロムベルディア人 (*Rombards*) は母音を控へるのである。次にイタリアの最初の作家連と云へば二、三の極く稀な例外は別として殆んど皆フィレンツェ人である。ポツカチオはフィレンツェ語で記すと述べ、ペトラルカは

其の問題には觸れてゐないが、ダンテは自分は宮廷語で記すと述べ、フィレンツェ語を含む特殊なイタリア語を非難してゐる。元來彼はフィレンツェに敵意を有してゐたので、凡ての事柄を攻撃したのである。尙言語はお互ひの交際で幾分模倣されるものであるから普通語はやはり特殊語よりも共通なものを含むものである。そして新しい主義、技巧が必然的に言語に新しい様式を齎し、其れと共に新しく輸入された言語の様式、格、語調に依つて修正され、其れと合體してしまふのである。然らずんば恐らく言語は下手な、つきはぎ細工のやうに變へられてしまふであらう。こんな工合で外來語はフィレンツェ語に改變されてゐるのであつて、かくして言語といふものは次第に豊富になつて來るのである。然し更に後には新奇な表現の過多に依つて雜種となる場合もあるが、侵略の場合を除いては、そうした結果を生ずるには長年月を要するのである。侵略の場合には言語は全く滅びてしまふことがあり、現在イタリアに於けるラテン語やギリシヤ語の場合のやうに作者に依つて再建されねばならぬの

である」といふのが其の大略である。此の言語論の思想と彼の政治的作品である「君主論」や「ローマ史論」の中に於て解明された觀念の類似を比較すると興味深きものがある。即ち前者は新語が或る國語を豊富にするのは事實であるが、やがて過剰の爲に腐敗してしまふ。其處で其れを純化することが必要になつて来る。其の爲には最良の古代作家の作品中にある本原的な様式を探究する事になるといふのである。又後者は人力といふものは國家を強め、國家に權力を與へる。而も勝利と權力は安寧を齎し、安寧はやがて卑窟と惡徳を招來し、遂には國家瓦解の源をなす所の怠惰を生ずるに至る。其處で國家を再興せんが爲には彼等を其の原始的な本原的な形に於て再建することが必要であるといふのであつて、兩者相通する復古的な原理に立つてゐるわけである。⁽⁶⁴⁾

次にマキアヴェルリは二、三の例外は別として不朽の詩人ダンテに依つて使用された言語は純粹にフィレンツェ語であることを實證する爲に、ダンテとの問答を交へて論議を開始するのである。以下其の概略を述べることに

する。⁽⁶⁵⁾「あらゆる言語は必然的に多少混入してゐるものである。所謂國語と稱し得るものは他から借用して來た語を都合よく變革するものであり、借用語に依つて變化させられずに、寧ろ彼等を自身のものにしてしまふ程に堅固なものでなければならぬ」と述べ、更に彼獨特の比喩に頼つて一層明確に其の意味を説明してゐる。即ち「ローマの軍隊は一二〇〇名の市民壯丁から成る二歩兵軍團(Legion)⁽⁶⁶⁾と二〇〇〇名の他民族を含んでゐた。而も有名なローマ軍の骨子は勿論前者のことである。ダンテよ——斯くマキアヴェルリは語り繼ぐのである——貴下の作品中には二〇軍團のフィレンツェ語を有してゐるが、フィレンツェ語の格、時、法を利用する貴下は恐らく偶然に來つた言語が其の國語の本質を變へ得るとは信じないであらう。又若し貴下は同じ動詞が全イタリアに用ひられてゐるからといふ理由で、其れを一般語と稱するとしても、其れは違つたものに變へられる恐れがあるのである。貴下及び他のフィレンツェの作家達は我々の用語範圍が全イタリアに採用される程に大なる名聲を博するやうにな

つたといふ考へに依つて誤導されてゐるのではなからうか。勿論我々がものする以前に他の地方で書かれた書籍と後に記された其れ等とを比較すれば、貴下は直ちに非常な相違のあることを識別されるであらう。事實イタリヤの他の地方の作家連は我々の言語を模倣しようとするに骨折つてゐるが、未だに成功しないのは自然が人工よりも遙かに鞏固なものであるからである。例へばトスカナ人は彼等自身の言語を一層トスカナ風に醇化、練磨して行くのである。尙又親しみのある言語表現が必要であつて、一般によく知られる爲には俗語でなければならぬ。喜劇の場合もトスカナ人でない作家は成功出来ないわけだ。何故ならば、そんな連中がトスカナ語を使へば恰も着物をつぎはぎにするやうなものだ。然し若し全然トスカナ語を拒否すれば極めて不完全な一篇の作品をものすることになる。其の一例としてアリオストの喜劇「I Suppositi」を指摘した^⑩。此の劇で貴下は素晴らしい構想、高雅で整つた文體、脚色を見出すのであるが、然し其處には、こんな喜劇に要求される滑稽味が乏しいの

である。之は言ふまでもなく前記の通り作者がフェラーの言説を排斥し、又一面フィレンツェの言説を十分に知らなかつたからである」と述べ、更に彼はフィレンツェ人には凡そ不向きなフェラーの表現様式の實例を少しく引用してゐるのである。尙又立派に話す爲には其の言語の凡ての性質を理解せねばならぬが、其れには言語の根源を知らねば結局不調和な述作になつてしまふと論じてゐる。彼は更に語を繼いで「作詩はプロヴェンス(Provence)からシシリー(Sicily)に傳はり更にトスカナ殊に最も適當な言語の見出され得るフィレンツェに傳つたのである。フェラー人やナポリ人や或ひはヴェネツィア人が非常に巧みな表現が出来るやうになつた根底には、フィレンツェの作家達の力が大いに貢獻してゐるのである。若し後者が最初郷土の不正格な方言を忘れる方法を前者に教へなかつたならば、そうはゆかなかつたことであらう。従つて次の結論に歸着せねばならぬ。即ちイタリアは何等一般語の殿堂を有しないのであつて、かゝる名稱が適用されるのはフィレンツェ語に於てである。其

のフィレンツェ語の語原について言へば、須く原狀に復歸することが必要であつて、餘程取扱ひにくいものでなければ其の言語をフィレンツェ語と認むべきである」と述べてゐる。

以上がマキアヴェルリの言語論の大意であるが、當時のイタリヤ言語學の状態を想起する時に或ひは彼が全然言語學者ではなかつたことを想像する時に、我々は彼の觀察力に敬意を表せねばならぬと思ふのである。或る言語の特色は其れが他の言語と共通のものを、どの程度に持ち得るか其の數の多少に存するものではなく、イタリヤ語の場合に於けるやうに實際變化する唯一の品詞である動詞に存するといふ彼の説は、結局或る言語の特色は其の言語の文法に依存するといふ主張と等しいわけである。之は有名なドイツの言語學者フリードリヒ・フォン・シュレーゲル(Friedrich von Schlegel. 1772-1829)が一八〇八年に「Über die Sprache und Weisheit der Indier」の名論文に依つて比較言語學の基礎を築いたのと同じの觀念である。マキアヴェルリの「Dialogo sulla

lingua」は今日まで餘り注意されずに來たが、明かにシュレーゲルの考へ方を彼が三世紀前に既に豫知してゐたことを立證するものである。

尙マキアヴェルリは自己の説を述べる場合に屢々或る人々は主張する(vogliano alcuni)といふ風に述べるのである。之は彼が其の基本的な觀念を他から借用したからであらうといふやうな憶測を懐かせるかも知れない。然し彼は何か非常に新奇な説なり考察を述べねばならぬ時には、いつも特に讀者の注意を惹く爲に此の類の表現を利用する方が便利であると率直に述べてゐるのである。又彼の時代以來殆んど現代に至るまでイタリヤの言語學界一般の傾向は彼と反對の説、即ち言語の特徵は其の用語數の範圍内で探究されねばならぬといふ主義を支持し來つたのである。彼は其れとは反對の原理から出發したのみならず、當時に於ては最も新しい結論を導き出したわけである。科學の進歩といふ點から考ふれば未だ< />不十分であつた當時に於て、兎も角も彼の觀察力なり勤勉さは科學の價値を高く評價したものと云ひ得るの

である。更に彼は發音を重要視してゐる。グンテに依つて進められた多くの方言から成る標準語に對して、其の中には何等生命を持たないつきはぎの言語が存在するといふ彼の駁論、又文法上全くフィレンツェ語に同化され醇化された言語の様式についての説明等は凡て近代的言語學者を想起せしむるやうな方法で論究されてゐるのである。此のことは又次に述べるやうな事實をも附加的に立證するものと言へるのである。即ち例へば社會、道德或ひは凡て知的現象の本質的な特色を發見するとか、其の特徴の法則を決定するといふ様な問題の場合には、いつも彼の天才が十分偉力を發揮し、彼の觀察力は深遠で物事の表相下に深く透徹せずんば已まないものである。

ロ、麗王ベルテゴールの物語

有名な小説「麗王ベルテゴールの物語」(Novella di Belfagor arcidiavolo)は疑ひもなくマキアヴェルリの作品である。其れは脚色、配役の描寫も多くないが、イタリヤ小説界に屢々見出される機智と諷刺に富んだ滑稽にして快活な種類の作品である。以下其の概要を述べることにする。

にする。⁽⁸⁾「先づ冥府の神プルート(P Pluto)が地獄に陥ちた凡ての男から異口同音に彼等の不幸の原因は悉く妻に在るといふ不平を聞かされるのである。其處で彼は羅間達を集めて會議を開いた結果、真相を調査することになつたのである。此の目的の爲に麗王ベルテゴールが人間の姿になり、一〇〇〇〇グカットの金貨をポケットにして妻を求めに地上に遣される。そしてフィレンツェでアメリゴ・ドナーティ(Amerigo Donati)の娘オネスタ(Onesta)と結婚するが、彼女の虚榮や親族關係等の爲に忽ち貧困の淵に陥つてしまふのである。彼に附添つて來た悪魔達も地獄の焰の中に歸りたいと希ふのである。ベルテゴール自身は債權者達にひどく迫害され、監禁されようとしたので逃亡の外、道が無くなつたのである。債權者の暴徒に追跡された彼はやつと一農夫に匿われ危い所を救はれる。其處でお禮の意味で其の農夫に次のやうな方法で莫大な富を授けることを約したのである。即ち今後其の百姓が悪魔に取り付かれた婦人の話を聞いた時には何時でも其れを蔽ひ清め行くやうに、さうすれば

ベルフッゴールは直ちに其の女の身體を離れる。かくして其の百姓は多額の報酬を得ることになるといふのである。こんな風で百姓は二回に亙つて此の忠告に従つて多くの利益を得たのである。然し二回目にナポリ王の王女の中に入り込んだベルフッゴールは愈々之が最後で、若し今後再び試みるならば非常に後悔するであらうと忠告したのである。かくして百姓は王から五〇〇〇〇ダカットの謝禮を受け、餘生を平和に送らうと決心する。然し既に彼が不思議な力を持つてゐるとの評判は到る處に擴がつてゐたのである。恰度其の時フランス王ルイ七世(Louis VII)の王女が悪戯に取り付かれたので、彼の助力を求め拒絶することを許さなかつたのである。従つて其の百姓は三度彼の力を用ひるべく餘儀なくされた。然し彼が王女に近付くや否や、ベルフッゴールは若し直ぐに退去せねばひどい目に遭はしてやると脅しつけたのである。一方王は如何なる理由をも聞かうとせず、若し承知しないならば死罪にすると脅迫したのである。かくして鐵鎚と鐵床の間に置かれた其の百姓は窮余の策として一

計を案出したのである。即ち彼はノートル・ダム(Notre Dame)の廣場に大きな木製の檣敷を設けて、其の上は大貴族や僧侶達を集めるやうにと願つたのである。そして廣場の中央には祭壇が設けられ、王女は彌撒が終つた後其の上に導かれることになつた。廣場の一隅には喇叭、號角、太鼓、笛其の他音の高い騒々しい樂器を持つた少くとも二〇人の樂隊が居る筈であり、之等の奏樂者達は其の百姓が帽子を空中に打ち振つて合圖をした瞬間に出來るだけ高音に樂器を奏し乍ら祭壇目がけて突進することになつてゐたのである。凡ての準備、手筈が整つて、今や貴顯高官は檣敷の上に在つた。廣場には人々が群り聖餐式も終つて王女は祭壇の前に起つた。其の間ベルフッゴールは絶へず百姓を威嚇して、若し直ちに退去せねば或る恐るべきことが彼の身の上に起るであらうと頻りに脅しつけたのである。然し彼は遂に帽子を高く打ち振ることに依つて之に答へたに過ぎなかつたのである。樂隊は忽ち凄じい音をたて乍ら突進したのである。ベルフッゴールは思ひがけない騒ぎに吃驚して一體之は

どうしたかとかと叫ぶのである。百姓はおまへの妻がやつて來る所だと答へる。之を聞いて惡魔はも早其れ以上を聞く間もあらばこそ最大スピードで地獄に駆け戻つてしまつた」といふ筋であつて、結婚生活の危険と苦難を譬へた小説である。

扱つて批評家の中にはマキアヴェェリが此の百姓の偶話を考案したのは彼の妻マリエッタ(Marietta)に依つて加へられた苦痛を暗指したものであると解してゐる者もあるが、最も信頼するに足る資料は明かに此の主張の虚偽であることを證明してゐるのである。マリエッタは彼に取つてよき妻であり、寧ろ彼の方が彼女から非難、叱責される價値があつた位である。又作家の中には此の物語はマキアヴェェリの作品ではないと稱する者もある。何故ならば極めて僅かに異つた譯文が一五四五年にジオヴァンニ・ブレヴィオ(Giovanni Brevio)の名前で出來たからである。然し一五四九年に發行されたジュンティ(Giunti)版は其れをオリヂナルな形で再版したもので、見かへしの所にマキアヴェェリの名を記し尙「斯様にして

他人の努力の榮譽を奪つた人から原作者の權利を獲得擁護したのである」といふ趣旨の宣言文を附してゐるのである。此の作品の原稿は後にフィレンツェの國立圖書館で發見され、其の文體なり語法について種々テストされた結果、全くマキアヴェェリの愛好したものであることが證明され終に論争に終止符を打つたのである。元來ベルフゾールといふ題目は彼自身の考案ではなかつた。其の出所は元々インドから來たらしく、其れがアラビアの書物にも記され、トルコの「*Quaranta Visirî*」(四〇人の大臣)の中にも見られるのである。従つて同書又は記された形に於てははななくとも口碑傳承の形で東洋からイタリヤに傳つたもので、其れをマキアヴェェリが採り上げ、後にブレヴィオ等に依つて巧みに剽窃されたものと思はれるのである。尙「麗王ベルフゾール」に非常によく似た物語が今日南スラブ族の間にも通俗的な人氣を博してゐるのは此の物語の起原が東方に在るといふ事實に依つて容易に説明され得るわけである。へ、其の他

先づ「Descrizione della Peste di Firenze dell'

anno 1527.」(一五二七年フィレンツェのペストに關する

記述)はスツロツツイ(Strozzi)に宛てた書翰の形式になつてゐるのであつて、其の原稿は今日フィレンツェの國立圖書館に保存されてゐるが、彼の作品を熟知してゐる者は恐らく何人も之を彼に歸すやうなことはないと思はれるのである。第一、一五二七年といふ年は彼が死んだ年であることを除外するとしても、當時種々の惱みに壓倒されてゐた彼がベストの記述に専念するやうな餘暇を見出すことが出来たとは到底信ぜられないのである。又其の中には一五二七年或ひは其の數年前に彼は再婚の話を持ち出してゐる。而も妻マリエッタは彼よりも長生きしたことは世上周知の所である。以下彼の言葉を借りて其の概要を述べることにする。先づ「自分は此の冗長な記述をなす爲に手一枚の紙葉の上に置くことを敢へてしたくない。實際之等の不幸を脳裡に想ひ浮べると記すことをためらふのである。自分はあらゆることを見て來たが、其れについて述べれば涙新たなものがある。一體

何處から始めてよいか解らないし、出來るなら喜んで手を引きたいのである云々」と述べ、同じ調子で暫く連續するが、やがて或る婦人の魅力について次のやうに記すのである。「彼女の新鮮で甘美な肉體は美事な象牙の如く、極めて僅かな接觸でさへ痕跡の殘る程に可憐で柔かであり、或ひは亦青々とした牧場の露けき若草がかわき獸の足跡を残すと同様である。更に薔薇と水蠟樹で飾られた堤の間にある蜜の流れるやうな口元、而も其れは如何にすれば天女のやうな微笑で輝くであらうか、實に言ひ知れぬ憂ひを帯びてゐるのである。白い磨かれた齒並の上の薔薇色の唇は燃えるやうなルビーと東洋の眞珠を一緒にしたやうに見えた。彼女は正にジュピター(Jupiter)の妻ジュノー(Juno)から優しく整つた鼻の形をヴァーナス(Venus)の女神から其の白い福よかな頬を盗んで來たやうである」と。従つてマコーレーも言ふやうに其れは徒らに美辭を好む或る文學青年の作品に過ぎないと思はれるのである。②③ そんな青年であるならば此の調子で書いて正にデカメロン(Decameron)の緒言より

も立派なものであると思ふかも知れない。而も其の初期の作品は思想と言語の男性的な點が特色であつたマキアヴェェリが殆んど六〇歳近くなつて死の四週間位前にベスト流行中再婚の問題や女性の肉感的な美について記したといふやうなことは全く想像出来ない處である。

尙最後に殆んど重要でない短篇を擧げると「Il Dialogo dell' ira e dei modi di curarla」(怒りと其れを癒やす方法に關する對話)があるが、之は二、三の人を除けばマキアヴェェリの作品であると主張した人は今日まで殆んど無いのである。^{②④}又「Discorso Morale」(道德論)は當時フィレンツェに數多く存在した宗教組合の或る集會で講述する爲に書かれたらしいのである。其の中には隣人愛と神に對する服従の義務、利益について人を動かすやうな語調と皮肉まじりの持味で取扱つてゐるが、別に其れ以外に特に注意を惹く點は無いのである。

以上がニコロ・マキアヴェェリの文學的作品の概要であるが、其處には如何にも彼らしい政治觀、人性觀が滲み出てゐるのであつて、一種の政治文學とも稱し得るもの

である。従つて彼の本領はやはり何處までも政治思想の闡明に在つたのである。幸ひにして本論文がかかる周知の事實の側面的探究に於て多少なりとも寄與する所があれば光榮である。

尙本稿は嘗て雜誌「歴史教育」に發表した「ニコロ・マキアヴェェリ管見」特にその私的生活について」の續篇として着手したものであることを附記して置く。以上。

註^{②⑤} G. Müller: M. G. Schriften, V. S. 211.

^{②⑥} *ibid.* S. 199. 即ち「クリッティア」の第一幕第一場でクレアンテロが「十二年前一四九四年にカール(Karl)王がフィレンツェを通過した時云々」と云々。

^{②⑦} P. Villari: L. and T. of N. M. vol. II. p. 352.

^{②⑧} G. Müller: M. G. Schriften, V. S. 194.

^{②⑨} *ibid.* S. 195.

^{②⑩} *ibid.* S. 198-201.

^{②⑪} *ibid.* S. 209-210.

^{②⑫} *ibid.* S. 212-213.

^{②⑬} *ibid.* S. 217.

^{②⑭} *ibid.* S. 221.

^{②⑮} *ibid.* S. 229-230.

^{②⑯} Macaulay: Essays, vol. I. p. 88. 據るマクローリー

も同じ意見である。即ち「老翁した戀人の上にかげられた奸策の語は甚だヒーモラスである。其れはラテン喜劇「カシナ」の場合ナリ蓋かたに勝れつゝあるナリ」と。

- ⑩ P. Villari: L. and T. of N. M. vol. II. p. 354. に據れば「此の「フリッツイア」の第四幕第四場は殆んど文字通り「カシナ」の第三幕第二場から、第六場は第四場から、第七場は第五場からの論議であり、第八場の獨白は第四幕第一場から模倣されたものである」と。

- ⑪ G. Müller: M. G. Schriften. V. S. 245-247.

- ⑫ *ibid.* S. 249-250.

- ⑬ P. Villari: L. and T. of N. M. vol. II. p. 354.

- ⑭ *ibid.* p. 355. 尙ほG. Müller: M. G. Schriften.

- V. S. 255-282. に獨譯がある。

- ⑮ ロマンツホ・ティ・フリッツキ・スッコツマイ(Lorenzo di Filippo Strozzi) はマキアヴェッヘルリの友人であり同時に保護者である。

- ⑯ P. Villari: L. and T. of N. M. vol. II. p. 356. 初森第五場の獨白詩は中〇首第三幕第五場は五六首の獨白を續してある。

- ⑰ Macaulay: Essays. vol. I. p. 88.

- ⑱ P. Villari: L. and T. of N. M. vol. II. p. 357.

- ⑲ 拙稿「ニコロ・マキアヴェッヘルリ管見」(歴史教育第十四巻第一號「三七頁」)

- ⑳ P. Villari: L. and T. of N. M. vol. II. p. 359. 拙稿「ニコロ・マキアヴェッヘルリ管見」(歴史教育第十四巻第一號「三〇—三二頁」)

- ㉑ 田部景治著「中世歐洲文學史」四五三頁。

- ㉒ P. Villari: L. and T. of N. M. vol. II. p. 361.

- ㉓ *ibid.* p. 362.

- ㉔ *ibid.* p. 363.

- ㉕ *ibid.* p. 363.

- ㉖ *ibid.* p. 364.

- ㉗ *ibid.* p. 365.

- ㉘ *ibid.* p. 366.

- ㉙ *ibid.* p. 367.

- ㉚ *ibid.* p. 368. 尙フイレンツェ国立圖書館にリッチ手記の文書が保存されてゐる。

- ㉛ G. Müller: M. G. Schriften. V. S. 285.

- ㉜ *ibid.* S. 286-292.

- ㉝ P. Villari: L. and T. of N. M. vol. II. p. 370.

- ㉞ G. Müller: M. G. Schriften. V. S. 298-304.

- ㉟ 「戰術論」の中ではローマ軍團は四五〇〇—六〇〇〇名となつてゐるから此の點完全に一致してゐないわけだ。尙拙稿「戰術史上に於けるニコロ・マキアヴェッヘルリの地位に就て」(史林第二三巻「第一號」一六二—一六三頁)。

- ㊱ マキアヴェッヘルリに依つて興へられた實例から考へると彼は

散文の「Suppositi」を引用してゐることは明白である。此のことはマリオオストが詩文の「Suppositi」を作成する以前に既に此の「Dialogo」が書かれたことを證するものである。

- ⑳ P. Villari: L. and T. of N. M. vol. II. p. 372.
- ㉑ G. Müller: M. G. Schriften. V. S. 307-318.
- ㉒ 拙稿「ニコロ・マキアヴェルリ管見」(歴史教育第十四卷第一號三二頁。)
- ㉓ P. Villari: L. and T. of N. M. vol. II. p. 377.
- ㉔ *ibid.* p. 374.
- ㉕ Macaulay: Essays. vol. I. p. 89.
- ㉖ P. Villari: L. and T. of N. M. vol. II. p. 375.
- ㉗ *ibid.* p. 378.